

第三部

事件を記録した人たち

原 爆 鮪

三崎保健所所長 坂 野 薫

世界中の話題となり、日本中を慄え上がらせた原爆鮪事件は、三崎保健所に関連した色々の事件のうちの圧巻である。

前日の夕刊に載った焼津の第五福竜丸の事を友人の家で見せられた時には、まだ他人事のような気易さでいたが、昭和29年3月17日の朝刊で「原子マグロ」という大活字の見出しのもとに、福竜丸の積んで来た鮫肉の放射線写真（ラジオオートグラフ）を見た時は、こいつは只事ではないと直感した。そして三崎の魚市場ではどうしているだろうと心配になった。宿直者からは何の連絡もないので、本庁からはまだ何ともいって来ていないと判断した。然し出先としても、一応何とか方針を立てなくてはなるまい。今日あたり入港する船は福竜丸と同じ原爆実験の灰を被っている筈であるから、調べなくてはなるまい。然らばその方法は？

その時チラッと、学生の時に実験に使った放射能測定機が浮かび出た。然しもう20年も前の事なので、機械の名称も忘れている。そのうち新聞のオートグラフからX線フィルムの利用を思いつき、まずはこれで気が落ち着いた。

その朝他の用事で町役場に立寄ったら、忽ち新聞記者に取囲まれ、彼等の真剣な口調から、思ったより事が大きいなと感じた。三崎の魚市場では今朝から鮪の相場が立たず、一船も水揚げしていない

という。「保健所はどうする?」と聞くので、「今日から各船の放射能を保健所が検査する!」と答えた。続いて「期間はいつ迄?」と畳みかけられたが即座に「今後2カ月の予定!」とやってしまったから、ハッと気が付いた。実のところ家を出る迄の作戦計画では、期間の事など全然考えもしなかったのであるが、何故かこの時すらすらと口から出てしまったのである。忙しげに鉛筆を走らす記者達を見ていると、大本営戦果発表の参謀のような気がして来て、「まあ好いや、拙速を尊ぶという事もある。後刻本庁の指令と食違いがあったら、その時に改めよう」と自分に言聞かせた。

保健所では衛生課長が私を待構えていた。早速方針を語り、X線技師にはフィルムを名刺大に切り、黒紙で2重に包んだのを一〇数枚作らせた。船体では殊に波に洗われないような高い場所、魚体は表面だけではなく、抉り取った肉の部分も調べるように打合せた。船は灰を被るだけだが、魚は灰に汚染された水も呑んだ筈であるからである。

其処へ魚市場係の丸岡君が飛び込んで来て、「これから業者と一緒に県へ陳情に行きたい」という。私は「我々が業者と共に右往左往するのは見っともない。今これから船を調べに行く。現地から行くからには、丁か半か、一応その結果を待ってからにし給え」と彼を止めた。「焼津でのオートグラフは露出30分であるが、三崎では大事をとって一時間とする」と即成の検査班に申渡し、指揮を衛生課長にとらせ、今朝入港した船へ急行させた。

さて次は本庁への連絡である。この朝は幸いにも30分とかからずに公衆衛生課が出た。この電話の声がいかにも落着いていたので、家を出てから次第に高まって来た私の亢奮も、話をしている間に薄らいで行くのを感じた。私の報告を念を押しつつ短く区切って、一つ一つ受け止めて呉れたのが印象

に残った。後で尋ねたら青山君と判ったが、彼は後に一船の鮪全部を外洋に投棄するのに、「僕が行きます」とあっさり申出て、県側代表の立会人となって、見届けて来た男である。

電話によると、本庁でもすでに活動の真最中で、課長も係長も当時横浜に2台しかなかったガイガー機を借り出して、中央市場に出向いて留守。更に他の一班は焼津鮪の入荷が疑われる小田原へ急行。「三崎でもこの機械が必要だろう」と課長が言っていたから、午後にはそれを持って行くだろうという。「ぜひ頼む」と電話を切った。果たして夕方近くなって、栗原課長、上山係長等が、機械とその技師を連れて三崎へきて呉れた。

私は初めてガイガー機を見た。米国製で仲々立派である。私の憶えている実習用の検知器など、これに較べると玩具に過ぎない。このGM管で数万単位を示さなければ原板には写らないという程我がお家の芸が鈍感なものだと教わった時、私の腋の下から冷や汗が流れた。私の前のテーブルには、放射能が陰性で抜け透った原板が、阿呆のように並んでいる。私の身体から急に力が脱けて行つて、もはや口を利くのもいやになった。朝来の英雄も今は全くの形無しである。もう一度GM管で朝の船を調べ直すために、私は勇気を出して立上がり、課長の車へ乗り込んだ。

魚市場はすでに暗い。しかも電圧が低すぎて、GM管が作用しない。そこで検査陣の足元は船から照らして貰い、市場の不要の電燈を全部消したら、やっとGM管が働きたした。検査班、業者、船長、新聞記者など、一同機械を取囲んで固唾を呑んだ。その間にも飛歩いて、人々の間をくぐったり、船の細い梯子を昇ったり降りたりしている白衣の男達は、魚具や衣類を船内の処々から集めている保健所の職員である。一時間位で検査は終った。甲板、魚体、人体、衣類：皆30カウントそこそこ。三崎

港の検査第1号は、確実に「異常なし」となった。その夜、夕食後から、業者も集めて課長を中心に色々と話合ったが、終わったら夜が明けていた。

昨夜は徹夜だったといっても寝坊してはいられない。二日目の私の仕事はGM機購入の事である。国産機は約18万円だが、県では予算措置に手間取る。鮪船は毎日入港するから1台や2台では間に合わない。それに課長が持って来たのは工業試験所の虎の子で、明日にも持って帰りたいという。私は朝の間に町役場に行き、丁度開かれていた臨時議会で状況を説明したら、満場一致で購入に決った。その夜遅く2人の厚生省技官がGM機を持って応援にきて呉れたのでホッとした。梅津、小畑両氏である。梅津技官は後に全船廃棄の立会人として青山君と一緒に乗船した人だが、その前夜家族への遺書を書いたという。一旦応と言えば決して悪足掻きをしない船乗氣質を知らない人だから、尤もな事だと思った。小畑技官は温泉法の事で数年後にまた三崎へくるとは思っていなかったであろう。またその夜電報で放射能の物指が報された。100カウントである。これ以上を示せば廃棄しなくてはならない。

機械は見透しがついた。今度は人である。本庁で計画した検知班が編成されるまでは何とか切り抜けなくてはならない。県立各保健所からは交替で応援を寄越して呉れたし、布沢地方事務所長も折柄年度末で忙しい処を2名派遣して呉れた。

機械にも慣れ、検知班も充実して来た。村山衛生部長の意を体して、業者の取引きに支障のないよう、検査は午後12時から午前1時頃から始められた。この頃第13号光栄丸が積荷の鮪を全部廃棄するかも知れないと言う事件が起きた。厚生省から恩田技官が特に来て、調査に慎重を期した。私は折悪し

く2、3日前から猛烈な痔痛で自家の二階に寝ていた。検査の途中の模様は日々電話で報告があった。全船廃棄となると少なくとも数百万円の損害なので、左様に簡単には決められない。またこの連絡に第三者は介入させられないので、恩田技官の電話の度に二階から降りて来なくてはならない。痛くて堪らなかった。終には恩田技官の慎重実直が恨めしく、階段をやっと昇り切ると暫く動けなかった。涙が流れた。全船廃棄と決まると、その決定書を村山部長が業者代表に手渡した。そして業者の質問に答えて「補償獲得に努力する」と約束した。微妙な所である。私などの出られる幕ではない。この日保健所で運営委員会があったが、私がまだ休んでいたのも、村山部長に司会をして頂いた。

このような上下を挙げての大騒動が始まった放射能検査も、この年の12月31日には中止となった。何か終り方が飽気無かった。それでも12月3日に皇太子殿下が弟妹の宮御同伴で魚市場へ来られて、我々に御慰労の言葉を賜った時は、それまでのもやもやした気分が一度に飛んでしまった。カウント数の高い鮪を棄てながら仙台へ帰ると言う船に立会人として乗込み、帰りは別の船へ沖で乗り換えて三崎へ帰る予定の所、うねりが高くて両船の接舷が出来ず、止むなく泳いで乗換えたり、また終始若い検知班の人達の中心となって活躍した飯島芳郎君も、殿下にGM管を実際に操作して説明申し上げた感激で、それ迄の苦労を忘れたであろう。

この事件の正体は、結局「枯尾花」のようなものだったが、寄せられた人の好意は感謝し切れない。肩を叩いて激励して頂いた県会議員の諸氏、セクシヨナリズムの壁など何処にあるかとばかり便宜を与えられた部外の人達等。そして私は出先きの長として、検知班員相互は勿論、外部の船員や業者との間に、唯の一度も紛争が無く、事故もなく済んだ事に満足している。

(神奈川県衛生年報昭和32、33年度版より)

原爆マグロ検査

三崎保健所総務課長

奥野 太郎

昭和二十九年三月一日、南太平洋ビキニ環礁にて、米国の第一回水爆実験が行われ、第五福竜丸が死の灰を浴びて、マスコミにのって国をあげての人道問題となった。

厚生省は、急拠南方海域から帰国する漁船に対し、三崎、焼津、塩釜等五ヶ所に入港を指定した。以後三崎に入港する漁船全部について、厳重な検査の命があり多くの話題を醸した。

三月十四日（注・十四日というのは何かの誤りではないか）、私が宿直であった夜、電報を収受、直ちに坂野所長の自宅に急行し、当面の指示を受けた。所長は検査の具体的方法等で非常に心配された。計測機は、検査要員は……。

そして間もなく、県が東京にて検査職員（獣医師）十名を確保したので、配属を待って検知班（班長鈴木衛生課長）を編成した。

早朝、夜間の入港に対処し、港に近い旅館に交渉し宿泊待機させた。当時、三崎港のマグロの陸揚げは年間六十億円で、全国に販路があった。食品衛生法に基づき、「人体に危害を与える物質の附着しているものはないか」と放射能の許容量の厳守を第一とし、特にストロンチウム90が大問題となった。

検査要領は、魚市場（会議室）にて、航海日誌を閲覧し、危険区域を航行したものは、慎重に検査

した。船員は全員下船、着衣のまま医師による検査、（異常者は日赤病院へ）。並べたマグロの上を携帯用サーベーターにて検査し、検出量の多かった時はガイガー計測器で再検査し、許容量以上の場合は、食品としての販売を中止とした。

水爆実験による汚染度の問題であるが、マグロは、それ以前のものは勿論味噌漬のものまで全く売れなくなった。

不合格の汚染マグロの投棄する処分の場所に困った。県有地以外は山中でも誰も承諾してくれなかった。

ある日、不合格として除外せし二尾が、夜間盗難にあい、誤って大阪方面に出荷され十六人の中毒者が出た。その後名誉回復のため、町と魚商組合が出したチラシが百万枚であった。

第十三光栄丸は検査の結果、全船投棄となり三万キロを金華山沖に棄てた。船員は生命を賭しての捕獲物に、愛着を感じ涙を流して自己の着衣と一緒に投棄したという。鈴木衛生課長は、遺書を懷中に乗船出航した。（後日全額補償国庫支出）

その年の春、葉山御用邸に御滞在中の皇太子殿下の行啓あり、「ご苦勞であつた」と有り難いお言葉を賜った。

十二月二十八日に検知班は解散した。翌年度に県費支出分を精算し、全額国庫負担となった。

三十年代には監査なく、三十一年度の監査の際は、マグロの検査で賞賛された。

三十年代の職員表彰に、献身的に尽力した鈴木検知班長の上申をしたが、検知班一同が団体表彰（金一封）の榮譽に輝いた。散在していた元検知班の参集を得て、慰労会を開いた。

三月中の経理については、県庁で心配されて、何とか処理したが、新年度分は予算の令達が遅れ五月中旬まで支払いに苦勞した。

当初、検査済証明書（一車一枚）の作成費が一八、〇〇〇円で負担するのは魚商か、町か、県か、大分もめたが魚商は検査済の証明書がないと商売にならず、県で払うことになった。

検印のインク代でも、月に三、〇〇〇円、検印の使用が激しく磨滅し、柄は折れて鉄製に改造した。見学来訪者の弁当代が、一五、〇〇〇円で、検知班員の旅館代が、一五〇、〇〇〇円を要し、色々都合もあり七月頃より、借家を捜し炊事のおばさんを頼み、月一〇〇、〇〇〇円で済むよう努力して、その残余金は退職手当金（臨時職員であり手当対象外）に代わるものとして支給した。

衛生部勤務十五年間のうち、特に三崎保健所の初代総務課長であった時のこの仕事で、忘れ得ない思い出として、深く印象に残っている。

（衛友会誌第一号 昭56・11・15より）

放射能にさらされる船員

神奈川県衛生部マグロ検知班員

二階堂 信 也

◇私は三崎魚市場で五月始め以来マグロの検査員をしているが、気になることが二つある。第一はマグロの検査が励行されて、市民は放射能から守られているのに、マグロ船乗組員には何等の方法も講じられていないこと。もちろん入港時にはガイガー係数管で身体のカウントを計りますが、かりに船員に高カウントを発見したときは一体どうなるでしょう。幸いにして今まで高カウントの船員は一人も出ませんが、すでに今まで彼等は知らずに高カウントのマグロを食べたり、スコールや海水ブローをあびています。現に先日三崎に入港したある船から、七千カウントあまりの、事件発生以来最高放射能マグロを発見しました。しかも船員は放射能マグロをたべていました。病院で白血球検査の結果、四千台の者が二人出ました。

◇しかも普通の場合、入港中船員の全員が診断を受けに病院へ行くのは、非常に多忙なため無理です。さらに年の大半を海上ですごす彼等は、放射能の知識もひくく、世論やその他の機関に訴える方法もあまり知らないようです。今まで彼等の身体に異常が認められないとはいえ、明確に害があると思われる放射能に彼等をハダカでさらしておくのは大きな人道上の問題です。幸い船舶用ガイガー係数管が製造されているようですから、ぜひ法律で常備させるべきです。

◇次にガイガー係数管とサーベイ・メーターでマグロを検査していますが、その両計器とも工場の

検査しないことです。商店のハカリですら年にいく度かの検査があります。大切な仕事をするこの計器にもしっかりした政府の検査を行うべきだと思います。

（昭和29年8月31日付け朝日新聞投書欄「声」より）

※二階堂さんはビキニ事件発生後、検知班員として三崎に派遣された職員である。

怖れと戸惑いの日々―或る「原爆日記抄」―

船員組合 M・S

昭和二十九年（一九五四年）

三月十七日

原子爆発の洗礼を受けた焼津のマグロ漁船のことで所謂マスコミニケーションはそれでもちきりなり。

そのとばかりで今日の水揚げは敬遠された由、この分でゆくと当分の間は相当の影響を受けるであろう。そうなれば最低保障の問題（註1）も当然持ち上がり、向ふ岸の火事を見るような訳にはゆかなくなろう。

「戦慄の七日間」を地で行くことになる（註2）。思えば悲劇的な二十世紀的現象なり。もし戦禍が及ぶとすれば……身ぶるいする恐怖、戦慄が頭をかすめる。

1 当時マグロ漁船乗組員の賃金は「四分六制」とよばれる大仲歩合制によって支払われた。その仕組みのあらましは、マグロの水揚げ代金からその航海に費消された諸経費を差引いた粗利益を、船主六〇％、船員四〇％の比率で配分したものだ。したがって水揚げ代が不漁とか、魚価の値下がりによってダウンすると、船員の賃金は往々にして有名無実になり、生活費の捻出ができなくなる。

そこで、新船員法では歩合制賃金の場合、歩合賃金が一定額を下回ったときは船主に

一定額の支払いを義務付けた。これを関係者間で最低保障とよんだ。

しかし、水揚げ粗利益のダウンは船主側も同様で、最低保障の支払いは新規の「持ち出し」になるため、低めに押さえられがちであったところから、当時の労使紛争の大きな火ダネであった。

2

「戦慄の七日間」このころ上映された原爆をテーマにした外国の劇映画。

三月十九日

明日よりの慰安旅行（註1）は例の放射能事件のあほりで無期延期。

業者の運動が功を奏してか、センセーショナルな報道はへったが、水揚げは未だ殆どストップ、長期化は必至なり。

目に見えない沈滞が町中をおほって日頃の活気が消え、さながら嵐の前の静けさを思わす。好況にあった鮪漁業がこのようなことで挫折するとは、誰もが予期しなかったことであろう。

註1

職員の慰安旅行。そのころはいまのように豊かでなく、気軽に温泉旅行にゆけるゆとりはなかったので、年に一度か二度の費用会社持ちの一泊二日の小旅行は、従業員に人気があった。

ところで件の慰安旅行は旬日を経ずして決行、のちに物議を醸すことになる。

三月二十三日

アカハタの掲示板に福竜丸船員救済のカンパの箱がつけられた。

三月三十日

出勤の途次、……の連中とぶつかり、十三光栄丸の件についての組合の態度を問われ、昨日迄の慰安旅行に哄笑をあびる。

追太刀の如く組合で待ちしものは、協約破棄の船主組合よりの通告（註1）なり。

帰り道、酒を飲み始め悲憤慷慨、ついつい度を過ぎ、だるま食堂からビーチに足を伸ばしたたか酩酊する。

註1 その年の春以来、歩合金の比率のことで、労使間で紛争が持ち上り、その過程で組合

が出漁船の出港拒否を強行したことから、船主組合から協約上の信義にもとる「山猫スト」だとする反撥が持ち上り、協約破棄の動きはある程度予測されていたが、いざ現実になるとショックであった。

四月一日

光栄丸の魚は太平洋へ遺棄を決定、午後三時出港、浅井氏（註1）は同乗する新聞記者連に労働の実態を説明するため便乗して行く。

註1 当時、三崎船員組合のリーダー、後に三浦市議会議員。

四月五日

夜半よりはき気を伴った腹痛が午頃続く。前夜十三光栄丸（註1）が入港するので、それを待つ間、持ち前の食い辛坊から急に雲吞が食いたくなり、半分程平らげたたりなり。

註1 つまり四月四日夜、四ケ日間にわたる放射能汚染マグロの海上投棄作業を終え十三光

栄丸は空しく母港に戻ってきた。これによって乗組員の二ヶ月あまりの苦労の結晶である三〇トン前後の漁獲物のマグロは、まったくゼロと化し、歩合給の原資は雲散霧消した。

四月二十日

水爆対策町民大会が、地区労の名で行われる（註1）。聴衆散漫。

註1 事件の拡大を恐れる業界の懸命な沈静化の動きもあって、原爆への表立った抗議ある

いは反対の運動は、二律背反で及び腰にならざるを得なかった。

四月二十一日

浅井氏は昨日と同趣旨の県民大会へ、光栄の人達を引具、客演のため出張。

五月一日

メーデー。立役者の内藤氏（註1）が横浜へ映画のフィルムをとりに行った。

二時からの予定が半時間以上遅れ開会。労組よりの参加員は京急の人達と、電話交換嬢がやや一団となり、後は散漫。

会後の映画会を当て込んだ子供が大半をしめる。

註1 当時三崎船員組合の執行部員、のちに三浦市議会議員。

五月四日

十三光栄丸の船員を連れ、久里浜病院へ行く。

病状を発表しないのは怪しからんと、いきり立って医務課長とやら会って話をきくと、尤もとうなずかれるところもあり、少々即断すぎたらしい。責任ある医師がそう当てずっぽうなことも云えまい。しかし船の連中は多少……の影響も手伝って、診断を拒否せんとする者もあり、柄になく慰撫役となる。連中の身になれば憤慨するのも無理はない。

さて医者意見はテストケースでもあるので、断定を下すほどの具体性は少ないとのことであり、疑いのみをもって保険等の休業証明は出し兼ねるとあっては、このまま今迄のような生活は続くまい。

政府としても、こうした判っきりしないものを、ある期間丈でも補償して、その経過を見ると云う様なことはちよつと考えられないのではなからうか。出来ない迄もこれは船員の意向を無視することは出来ないから接渉する必要がある。

万一それが不可能の場合、将来これに関連する症状発生の場合、保険者と同一の権利を付与することの了解が得られれば、一応働き出すのではあるまいか。

註

文意の不明、記述の混乱はとりもなおさず、得体の知れない放射能禍に翻弄され怖れ、戸惑って右往左往する船員とその組合の困惑ぶりがうかがわれる。

五月二十二日

今日も雨、その上うすら寒し。

浅井氏はNHKの録音で、朝から昼過ぎまで役場で待ったが、待ちぼうけで帰って来る。

六月四日

珍しく快晴、内藤氏は原爆対策の会合で東京出張。

平和会議に來ているインド・セイロンの坊さん達が、信徒のたいこを伴奏に町を歩いている。遠き異国より訪れし、平和の使徒に敬意を捧げよう。

九月二十三日

秋分の日、当直。

福竜丸の久保山愛吉氏、遂に逝去さる。

九月二十四日

吉田首相渡米の機会を捉らえ、明日焼津の人達に合流、外務省並びに米大使館へ陳情に行く予定が、久保山氏の死によって更に有意義になろう。

九月二十五日

浪人中の船員五人と連れ立ち、東京行き。

観光ホテルで広瀬氏（註1）焼津の人達と落合い、先ず外務省へ赴き政務次官と会見するが、役人特有の事務的回答しか得られず土曜日とて次ぎの米大使館へ行く都合もあり、早々そちらへ出向き右社戸叶里子（註2）の紹介と通訳でティラーと云う役人に会ふも、これ亦御座なり。

註1 のちの原水協活動家広田氏かも知れず。

2 アメリカ留学の経験を有する当時の女性代議士。

十月十二日

昨夜の地方大会に次いで、今日は一時より読売ホールで、原水爆対策全国大会が開かれ、船主、在港船員と共に組合事務所も全員これに参加する。

終わってより例の如く米大使館へ陳情に行くが、これも亦事務的回答に終わる。

昭和三十三年（一九五八年）

八月八日



三崎下町を行進する平和行進の一行
（三浦市職員組合蔵）

夕刻、広島からの平和行進（註1）の一行が到着すると云うので、小山氏と迎えに出るが、すでに一行は役場の前で、川崎市長の歓迎の挨拶を受けている処であった。

代表の西本と云う男の答辞は明快で流石と感じさせる。一行は二十五名位ときいていたが、労働組合の連中や、共産黨員と思われる人達も多数加わり、なかなかの盛況である。

挨拶交換の後、亦行進に移り我らもその行進に加わる。多少面映ゆい思いであったが。公園で形通りの歓迎会の後、一行は組合の寮と、丸魚の寮へ分宿する。

註1 原水協主催の全国規模の平和運動

八月九日

定刻より三十分程早く出勤、昨夜の後片付けやら、今朝の出立の支度をなす。

昨日は黒さん（註1）が関谷たち四名を連れ津久井から歩き、今日も葉山まで歩くことになり、九時一行の後について公園前を出発する。

油壺入口から送る人もなくなり、愈々行進らしくなり暑さも激しくなってくる。

この一行の中には、あるいは売名的な要素があるかも知れないが、原水爆禁止と云う素朴な願いに人々の心が結ばれていることは、歴然たる事実である。

「人間の壁」を読んだ後だけに自分達の前をプラカードをかかげ、汗をふきふき歩いている中年の女教師の真摯な態度は印象的であった。

註1 当時、三崎船員組合執行部員、後に三浦市議会議員。

八月十四日

黒さんは関谷氏を連れ、原水爆禁止世界大会へ出席。

※「註」はいずれも筆者による

（個人の日記より）

原爆マグロ事件始末記

県衛生部公衆衛生課

小野

勝

死の灰のショック

「南太平洋ビキニ環礁の原爆実験の降灰（死の灰）を浴びたマグロ漁船『第五福龍丸』が焼津に入港！」と報じた昭和二十九年三月十六日の読売新聞夕刊の特種記事で日本中にショックが走りました。翌十七日朝の三浦市（当時三崎町）は町役場、魚市場、保健所に一斉に報道陣が押し寄せて大騒ぎになりました。

三崎保健所は坂野所長を先頭に早速、対応に乗り出しましたが、食品の放射能汚染は全く初めてのケースで測定器も検査基準もなく、急遽、所長のアイデアでX線フィルムの感光を利用した放射線の検知を試みることにし、入港中のマグロ漁船の船体、船具等の測定を実施しました。その結果は特にX線フィルムに感光するものはなく、シロと考え、所長は直ちにこの状況報告と県の応援を求める電話連絡を公衆衛生課に行い、今後の県の対応を待ちました。

緊急検知班の出勤

同じ朝、県庁内も同様の騒ぎで、当時衛生部公衆衛生課獣医務係で水産食品担当の私は、測定機器（ガイガーカウンター）の確保に大わらわでした。機器は衛生研究所にもなく、最初はどこが所有し

ているのか見当つきませんでした。数か月前に映画館で見た「神奈川ニュース」に、県工業試験場に西ドイツ製の測定機器が納入された場面があったのを思い出し、早速、工業試験場に交渉し、機器と担当職員の派遣の了解を得ました。さらに、横浜の中央卸売市場にも遠洋漁船の入港があるので、横浜市と連絡して、横浜市大医学部放射線科の国産の機器と宮川教授の応援を得ることができ、十七日の昼ごろまでには緊急検知班二班の編成が終わり、第一班は栗原公衆衛生課長、山上獣医務係長と私が、工業試験場から大野技師と機器を乗せて三崎保健所に急行し、第二班は中島技師が横浜市職員、宮川教授と横浜中央卸売市場に出発しました。

第一班は午後四時頃に三崎保健所に到着して状況の説明を受け、魚市場に向かいましたが、既に報道陣や関係業者等が、多数集まり検知班の到着を待っていました。

早速、数隻の検知にかかりましたが電力事情が悪く、電圧が低くて機器が作動せず、急ぎよ、市場内全部の電気の使用を停止し船の照明を頼りに検知を始めました。

幸い測定結果は特に異常と思われる数値の検知はどこにもなく、汚染された心配はありませんでした。直ちに県庁で待機している青山技師に連絡し、村山衛生部長に報告し、同じく異常値を検知しない横浜の市場での測定結果と併せて、栗原課長が、「神奈川県内に入港しているマグロ漁船に放射能汚染は認められない」と第一回の記者発表を行いました。

監視本部と検知班の発足

一応、県内漁船の死の灰被害はないと判明しても県民の受けたショックは大きく、マグロの消費は

ストップし値もつかず、関係業界は大恐慌を起しました。死の灰に汚染された漁船は、今後発生すると予想されるため、国も厚生省、農林省を中心に緊急対策を講じ三月十八日づけで遠洋マグロ漁船の入港を東京、三崎、塩釜、清水及び焼津の五港に限定し、外国に寄港しない遠洋漁船についての特別検疫の義務づけを決めました。そこで県は公衆衛生課に監視本部と精密検知班を、三崎保健所に支部と検知班を設置し二十四時間の検疫体制としました。

監視本部は夜間も交替で二名の職員が県職員会館に泊まり込みで対応し、現地の検知班は昼間は魚市場会議室に常駐し、夜間は岬陽館に宿泊待機をしました。

検知班員は職員数の少ない三崎保健所ですから、当初は公衆衛生課及び県各保健所からの応援者で補い、後に専属の新規採用の職員を増員し、三班十二名の編成となりました。

測定機器は理化学研究所製の三十二進法のガイガー・カウンター一台を入手して発足し、途中能率を上げるため、東芝製の八進法の携帯用機器（サーベーター・メーター）一台を購入して使用しましたが、これらの代金支払いは、緊急事態のため後払いと交渉し、個人の借用証で機器を受け取るという冷汗ものでしたが後に増加された機器分と一緒に厚生省が支払い、先ずはホッとしたものでした。

検知班の大活躍

検知班は飯島技師が班長で、業務は町水産課からの漁船入港情報を元に、漁船が入港次第船長、漁労長から航海日誌の提出を求めて、航海状況・船員の健康状態・操業海域等の聞き取り調査を行います。航海日誌といっても漁船は大学ノートの粗末なもので、操業海域は各船とも極秘事項で正確な状

況を聞き出すのに苦労しました。一方、測定は人体五〇〇カウント、船体二〇〇〇カウント以下を汚染なしとし、魚体はエラ部分で、一〇〇カウントを超えたものは廃棄対象として、全品測定を実施しました。当時の魚市場のせりの開始は午前五時頃のため、マグロの水揚げは午前三時から始まりません。検知班員の起床は午前二時でした。三月下旬の海風は冷たく、吹きさらしの市場で、砕氷、流水を浴びての業務は今思っても辛い作業でした。

大方の漁船は水揚げの前日の昼間に入港し、聞き取り調査や人体、船体の測定は昼間終わりますが、中には夜間遅く入港予定の船が一刻も早く上陸したい船員のために、入港予定時間を無線で午後六時頃と通報し、検知班が待機していても一向に入港せず、結局夜遅くにやっと入港してくるということがあり、睡眠不足で検知班員は疲労の極に達しました。報告書に知事の名前を書く段になって全員が知事の名前が浮かんでこないという嘘のような話もあり、また、連絡者が横浜行急行のバスに乗車と同時に寝込み、しばしば終点まで、乗り越すということもありました。

汚染マグロの海洋投棄作業

検疫開始後、しばらくは汚染された漁船の入港はありませんでしたが、三月二六日に入港した「第十三光栄丸」から高い数値のマグロが検出され色めき立ちました。直ちに水揚げを停止し、本部に連絡して指示を待ちました。当初は行政処分権限は厚生大臣にあり、厚生省も初めてのケースのため担当の恩田技官を三崎に派遣し、検査を重ね慎重に対応しましたが、結局全品廃棄として、大臣命令が出されました。「廃棄方法は海洋投棄（野島崎沖一〇〇カイリの黒潮の中）、廃棄確認には厚生省、



マグロを廃棄するため三崎港を出港する第13光栄丸（小野勝さん蔵）

農林省及び神奈川県職員」と指示されました。農林省は水産庁の航法の分かる職員、厚生省は乳肉衛生課の梅香技官、県は海軍兵学校卒の青山技師が買って出て乗船することになりました。数か月の苦勞の末のマグロを、補償も明確でないまま廃棄を命ぜられた船員たちの落胆が著しく、確認班の一同は海上での不測の事態を考えて決死隊の覚悟での乗船でした。

出港して三日後に「第十三光栄丸」から投棄作業を無事終わったとの無線の報告が入った頃、今度は「第七明神丸」から高い数値のマグロが検出され、廃棄命令が出され今回は私が乗船することになりました。命令書の到着を待ち、夜半に三崎港を出航した「第七明神丸」は、九五トンほどの戦前建造の木造のボロ船です。鈍足に加えて殆ど空荷の船の揺れは想像以上で、海上の風速は二〇メートルの時化で、船の最高部の船長のベッドに寝て、それより高い位置にある船窓から海面が見えるのです。また、トイレも露天の船尾に突き出した張出板の穴の上にしゃがんで夜空を眺めながらの作業です。

三日目の朝に天測で位置を確認して投棄作業を行い、三十分ほどで終了しました。さすがに船員たちの表情は厳しいものでした。その翌日の夜に船は無事に母港の石巻港に入港しました。その夜の動かぬ宿の布団の寝心地は最高でした。

その後も廃棄命令の出る船が続き、主として、青山技師、飯島技師と私の三名が交替で何隻かの船に乗船しました。

行政処分権限は五月から知事に移管され、県の監視員と水産試験場職員のみが乗船しました。投棄船は必ずしも投棄後に三崎に帰る船ばかりでなく、私は遠くは気仙沼港まで行きました。飯島技師などは太平洋で寄港する船に泳いで乗り換える離れ業をさせられたこともありました。海上の波浪の具合などで一部は出港することが出来ずに陸上に埋められたものもあります。

厳しい投棄確認出張でしたが、領海外での作業ということで、当時珍しい海外出張の扱いが行われ、伊豆七島が都内になるので国内出張扱いの東京都職員には羨まれました。

また、後日十分ではありませんが、米国はこの事件に対し補償金を支払いました。

特別検査の終わり

原爆実験から日時が経過して次第に汚染された船の入港が減少したため、国は十二月二十八日づけの次官通牒により、特別検査は十二月末日で終了し監視本部体制が解かれましたが、その間九か月半（二〇三二日）、検査した船五三六隻、廃棄命令を受けた船一五三隻、検査した魚約三万三〇〇〇トン、廃棄された魚約一九八トンでした。

検査班の活動は知事から特別表彰を受けたのは当然ですが、途中も議会の常任委員会等の視察の際に異例の慰問の酒を頂くなど大きく評価されました。また、十二月三日には皇太子殿下（今上陛下）のご視察もいただきました。

この事件での県庁各部署、三崎町、関係業界及び県民の協力と支援は特筆に値するものだったと今でも思っています。

（「50周年記念誌・県三崎保健所」より）

原子爆弾とまぐる漁業

筆者不明

三月一日焼津の漁船第五福龍丸が、不幸にもビキニをさること七十五哩に於いて、米国原爆実験の犠牲として、強力な放射能を持つ灰をかぶり、大問題を捲起した。

新聞には毎日「死の灰」「死のマグロ」等、又僅か二〇—三〇数／分（カウント・パー・ミニッツ）放射線でも、重大なる被害があるようにかかげた。然し乗員諸氏は常時海の上で生活し入港後「貴方の取ったまぐろは大丈夫か」とか「どこで取れたまぐろでも食えば死ぬのか」等無茶な質問を受けることがあるので、一応その説明資料として放射能についての概念と、現在までに調査した結果とを表することとした。

放射能は何も原子爆弾に限ったことではありません。太陽も原子爆発をして我々に光と熱を与えていると云うことです。又レントゲン（X線）も我々の病気を治す為には、無くてはならぬものです。又最近ではアイソトープが日本にも輸入され医療や色々の実験に有効に使われて居ます。又将来（或は現在）原子力潜水艦、飛行機等も出来るし、原子発電所も出来るでせう。

さて我々にこんなにも有益な放射線もある限度をこせば、人体に有害となるのです。非常に少量であるが、地球上のあらゆる物体が、放射能を感じて居ます。その量は二〇—一〇〇数／分（カウント・

パー・ミニッツ)位のものです、特に地域的には(ラジュウム温泉の有る所等)数千を算えることがあります。

将来原子力船や飛行機や発電所が出来れば、この空気中や水中にも相当の放射線を感じるやうになるでせう。ですから我々が放射線を受けているのと同じ様に、魚が放射線を受けていても少しも不思議はないのです。

唯、今度の原子爆発で其の付近(裏面航跡図の通り)を航行した船が、或る程度普通以上に、放射能を持ったのは事実です。然しその量はいずれも人体に無害である三〇—三〇〇数/分(カウント・パー・ミニッツ)で魚鱸の中の魚に就いては、人体やお米が受けて居る二〇—三〇数/分(カウント・パー・ミニッツ)と変わりありません。

但し第五福龍丸に就いては、放射性物質が、直接に船体や人体、釣り上げた魚等にふりかかった為、人体に無害範囲を超える、一万以上の放射能を持ったのです。

現在までに調査した、漁船の放射能及び原爆実験位置よりの距離等を発表し、乗組員諸氏の不安を除去し、今後の参考にされると共に、いたづらに恐怖心を持たず、正しい判断のもとに知らない人にはよく説明してあげて頂きたいと思ひます。

〔説明〕 カウント・パー・ミニッツとは ガイガー計数管で放射能を持った物質からとび出す粒子の一粒ずつを一分間に何個と数えて出したものです。

ガイガー計数管を室内の机や人体にあてても、二〇—三〇数/分の音がでます。之は宇宙線や土地

船 名	ガイガー計数管測定値		
	魚		船体その他
	最大	最小	
10住吉丸	39	27	
8 福吉丸	37	29	
13丸高丸	45	19	
11丸高丸	39	16	帽子84-43
西 丸	26	22	船体26-24

品 名	ガイガー計数管測定値
夜 光 時 計	1000-86
天 然 石 類	325-20
暗室用液温計	32
蛍 光 灯	24

〔註〕測定値は直接ガイガー計数管に
当てた場合を示す。

の天然放射能や太陽光線の紫外線等が計数管に当たって音を出すためです。従って魚や船が二〇—三〇数／分を算えられても、何等危険はない訳です。

第五福龍丸の持帰った灰は、三月十五日の測定で、三〇、〇〇〇数／分もあり、一日10%程度減衰しているから三月一日頃の放射能は、はるかに強かったと思はれます。

参考迄に三月二十二日に調査した、三崎港入港船の魚とその他のガイガー計数と我々が日常使用しているもののガイガー計数とは次表の様になり、各船の航跡は別図の通りです。

筆者は県水産試験場職員と思われる）



被爆鮪の解剖結果について

筆者不明

本年三月のビキニ原爆事件以来三崎魚市場の岸壁には威勢のいい水産人に立混じって白衣の人物が散見して丁度医院の門口にでも立った様な何か不気味な印象を与えている。食品衛生管理の立場からの尊い仕事で白衣の人達も誠にお役目ご苦労なこととは思ふが我々水産人にして見ても三崎の魚が例のガイガー計数管とやらの医者の聴診器みたいなものから一日も早く解放されたいものと熟々思ふ次第である。

「一〇〇カウント廃棄ですよ」という方も辛いだろうが検査に不合格となったうまそうなまぐろを見るたびに一〇〇カウントまぐろの実態をある程度細密に測定した結果はどんなものであるか知りたいたとは齊しく思料するところである。

偶々四月下旬神奈川水試で行った廃棄鮪細部測定結果について次に抄録した。

◎供議魚 キハダ（三貫五〇〇匁） シイラ（三貫匁）

何れも廃棄魚の中で最も汚染度の大なるものを撰んだ。但し外観は鮮度もよく脂肪分も上々の見事な魚であった。

◎採捕船 〇〇丸（四月下旬三崎入港）

◎漁 期 三月二十五日より四月下旬まで

◎漁 場 北緯一〇度、東經一八〇度付近の東カロリン海域

◎測定結果 測定数値は略図に示した通りであるが之を要約すると

- 1 外部の放射能物質は比較的少なく且つ水揚時の水洗によって相当除かれている様である(例えば鰭の裏辺りの洗滌しにくい所は比較的残っていたが再洗滌により遥かに減衰している)
- 2 再洗滌して尚残っている汚染度は化学洗剤を用いて洗っても効少なく効果はあまり期待出来ないようである。
- 3 鰓の部分に多いが之は漁場水域が相当汚染されていることを示すものと思料される。(海水の汚染度は体表の数値位と仮定しても鰓は一種の水濾しであるので鰓に集まっていると説明出来る)
- 4 胃及び腸の内容物に大であることは魚が漁獲される時までの環境水域が汚染されていたといふことになる。
- 5 魚皮の裏側は全くないと云へる程少く筋肉そのものは自然計数より少いといふことは水産関係者にとって大きな光明に思へる。

結論として骨や皮や船体にいくら反応があろうと筋肉だけを賞味する魚であってみればこゝに打開の途が開かれている様に考へられる。

原爆マグロ葬送航海

三崎港遠洋漁船船員組合執行委員長

浅井繁春

二ヶ月間筆舌に尽くせない苦労の後、一三、〇〇〇貫のマグロを満載して三崎に帰港した第十三光栄丸を待っていたものは「食品として不適當」という余りにも悲惨な歓迎の言葉であった。

私はさる一日午後三崎を出港し、無事「海中投棄」の任務を終えて四日午後九時帰港した第十三光栄丸に同乗した。

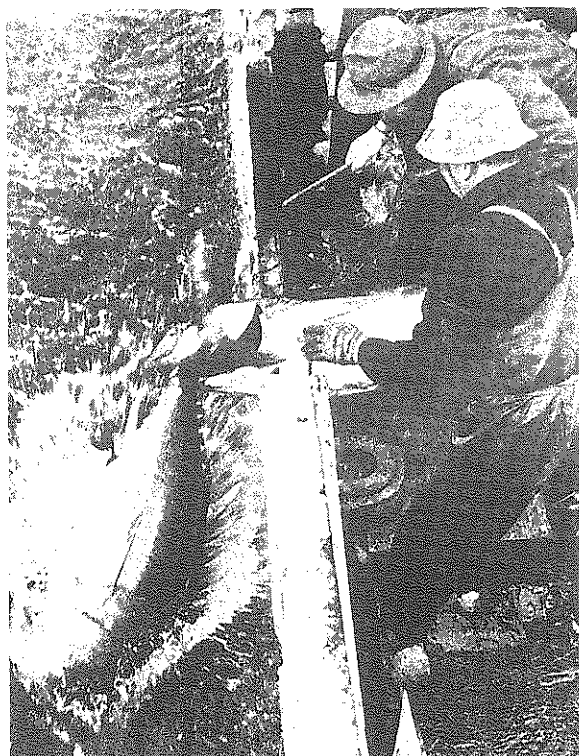
乗組員は岡野益夫船長、船主代理の岡野漁撈長以下船員二十四名、立合いの厚生省梅香技官、水産庁松月技官など四名、マグロを計量するマル生社員四名に報道陣を含めて総勢四十名だった。

私は原爆マグロの損害保障（補償）を初め、日々闘わねばならぬ組合活動の重要性を痛感しつつも、敢えて同乗した所以のものはとうてい一般陸上人には理解して貰えないかも知れない。

それは「涙と共にパンを食ったものでなければ人生の味は分からね」と云われた様に、永い間漁撈に従事した私には、無言の船員の表情から悲痛な叫びを聞くことができたからである。

船主や他船への気がねもある、生活への不安もある、それはたくみな言葉では表す事は出来ないであらう：船員に代ってせめて彼等の苦しみの万分の一でも表現し得たら：と私はじっとして居られなかった。

船は四月一日午後三時三崎港花暮岸壁を静かに離れた。



マグロの廃棄作業をする第13光栄丸乗組員
（「母と子でみる第五福竜丸」より）

岸壁には村山県衛生部長、船主初め関係者、乗組員家族など見送り人が数十名、「二ヶ月間苦勞してとってきた魚を捨てに行く船員が可哀そうでなりません」と云う金沢船主や組合執行委員の言葉が、皆の気持ちを反映してか、歓声一つないしめやかな風景であった。

手も振れずうつむいている乗組員、これから先の生活はどうなるのであろう。

第十三光栄丸が南方漁場に出漁したのは二月三日、一航海まる二ヶ月を要した。しかも乗組員二十四名のうち十二名が世帯を持ち、他の者もほとんどが一家の大黒柱、一文の金も入らず、すでに質屋通いを始めた家族たちは食うに困っている。

三日いよいよ作業決行の朝四時三十分、総員起こし、氣遣われた天候も回復、水平線付近を除いて靑空が見える。乗組員は全部ゴム長にゴムズボン、間もなく日の出、水平線を赤紫にそめて大きな太陽が静かに昇る詩的な一瞬、海

中投棄第一号メバチマグロ十二貫五〇〇が船体を離れた。時に五時七分、二、三度回転して白い腹を見せながら沈んで行く。じっと見つめる船員の目：「あゝ」悲痛なつぶやきもれる。愛児を水葬するにも似た気持ち、誰れ一人笑顔一つ見せないこわ張った作業である。

全部で一三、五〇〇貫、損害価格五〇〇万円、捨て終ったのは十一時であった。

ただピンチョウ、カマス、スキヤマがそれぞれ一尾ずつ計八貫匁が残された。これは試験用として、東大檜山博士のもとに届けられるものと云う。

作業は終わった。ほっとした瞬間、船員一同は舷側に整列した。水泡に帰した二ヶ月間の労苦、最後をまっとうし得なかったいとしのマグロ、悲憤、悲慘、おお、そうだ、誰れ云うとなくサンマを各自手にして静かに海にまいた。

残念だったなあ――往生しろよ――さようなら――

静かに合掌している乗組員は再び全速で帰途についたエンジンの響きでわれにかえった。

船艙は放射能が残っていると考えられるので数時間嚴重な水洗いが実施された。

あれだけ離れていて、しかもその後スクールを約十回浴び、数回船内の全面的水洗いもやったのにこの始末である。アメリカの原爆実験が続く限り第二、第三の光栄丸の出てくるのは必然である。

ヒトデや重油被害で沿岸漁民は泣き

演習地では漁民の生活がおびやかされ

李ラインやアラフラ海では縮出され

インドは日本船のインド洋操業に神経を使い出し

その上原爆で取った魚を捨てるとは

：一体日本の漁民はどうして生きて行ったら良いのであろうか？

私は船員と真剣に語り合った。

皆がもっと団結しよう。

そして生き抜く道を考えよう。

船は四日午後九時約八十時間の航海を終えて三崎へ入港した。

照明灯もつき真昼のような明るさ、だが二週間前大漁旗をなびかせながら入港歓迎を受けた時とは打って変わった淋しさであった。

労をねぎらう出迎えの人々もまばらに葬送航海にふさわしい入港であった。

ルポ―死んだ港・三崎

比留雅夫

三浦半島の突端、東京湾と相模湾の潮の混り合う地点に三崎町がある。町の中心部に近い小公園の噴水の前に坐って眺めると、すぐ目と鼻の先に大きな牛のように横たわっているのが城ヶ島である。白秋の歌で名高い島の筈だが、うすばけた陽光の下で眺めたせいか余り詩情らしいものも感じられない。しかしここが油壺と共に神奈川県の大観光地として持っている名声は非常に高い。いくつかの修学旅行や遠足の団体がバスを連ね、小型蒸気に鈴なりになって城ヶ島に運ばれる。

しかし何といっても三崎の町はまぐろの港である。小公園の右手には魚市場の大きな黒い天蓋が見え、岸壁には何隻ものまぐろ船が横づけして水揚げの最中である。左手には大洋漁業の大冷蔵庫がデーンと坐っている。すぐ目の前を、二人の若い船員が十貫匁ほどのまぐろを一本の棒の真ん中に吊して、えっちらおっちらと歩いて行った。まぐろが町の真中を歩き廻っているという感じだ。三崎がいかにもまぐろに依拠した漁港であるかということは、三崎を利用するまぐろ船が地元船県外船を併せて二八〇隻、年間水揚げ約一、五〇〇万貫、水揚げ金額五五億円、わが国まぐろ全生産の七割を占める、という数字を見ただけでもはっきりとする。

魚市場の中をのぞいてみると、もう入札の済んだ一〇貫、二〇貫の大まぐろが文字通り頭を並べて、腹に買手の印と、放射能検査印とを押されてずらりと横たわっている。市場の隅の方で真白な白衣を

着た検査官がガイガー計数器を扱っている姿が見える。それがこの場の雰囲気とは全くそぐわない異様な感じを与える。その魚市場の建物正面にデカデカと下げられた二本ののぼり

食べて安全三崎のまぐろ

安くてうまい三崎のまぐろ

それは三崎町が今度の水爆で蒙った大きな打撃と、まぐろを売るために業者が必死になっている姿とを象徴的に表している。

三月十六日焼津で第五福龍丸に放射能が発見されてから、まぐろの値段は平常の三割から五割かた大暴落し、例年なら花見時で、まぐろはかき入れ時であるのに、まぐろの港三崎は経済的な大打撃を受けた。その損失額は三月三十一日現在に於いて一億二二八〇万円に達したという。直ちに対策本部が作られたが、それは船主や魚商のみで作られ、船員組合などは除外された。

対策本部のまずやったことは、

第一に大衆の不安を消して何よりもまずまぐろを売る事であり、

第二に県よりの融資折衝であり、

第三に政府への損害補償の要求であった。

原水爆禁止の問題は抽象的には加えられたが、何ら具体的な対策はたてられていなかった。ところが三月二十六日入港した第十三光栄丸の船体、まぐろから放射能が発見された三崎町は二度目の、より深刻な大衝撃を受けた。

タブロイド版の地方新聞三崎港報は

「三崎今や死の街化す」(3・31)

とトップ見出しをつけた。十三光栄丸のまぐろは全部廃棄と決定、光栄丸は再び船足も重く三崎を出港、野島沖に一万貫のまぐろを投棄した。こうして三崎のまぐろ経済は一層の混乱に陥り、まぐろ価格は低迷を続け、船主の中には操業不能となるものも表れ、魚商も十軒ばかり倒産の已むなきに致った。町議会、対策本部も混乱を続け、初めの「売らんかな」対策ではどうしようもない所まで来ている事が痛感され、中央への働きかけ、補償の要求が前面に押し出されて来ている。船員組合では、四月二十五日に町民大会を開くべく町議会、対策本部に呼びかけたが遂に同調できず、地区労主催として持つ事になったという。翌日は朝から猛烈な豪雨であったが、昼前に少し小降りとなった。

遠洋漁業船員組合という看板のかかっている扉を推して入ると、すれ違った子供達が、「食べて安全三崎のまぐろ」と大声にどなっている。今日は組合の委員長のはからいで、この建物の一角を占める船員ホームに泊まっている十三光栄丸乗組員の方たちと座談会を持つのだ。船員ホームの新装の広間に入ると、正面に鴨居一杯の大きな神棚がデンと坐って、室内を圧している。出席者は光栄丸の船員五名、ホームに泊まっている他の船員三名、計八名である。

座談会は、はじめ余り活潑ではなかったが委員長が席を外した頃から急に活気づき、鋭い意見が次々と出された。まず光栄丸が三崎に入ってどんな扱いを受けたかということが切実な生の声で話し出された。

「衣類を置いている下宿屋も入れてくれないんですよ。旅館も勿論駄目だし、風呂屋でも断られる……」

とうとう組合委員長のはからいでこの船員ホームに入れてもらったという。

「友達の家に行ったら、坐布団も出さないお茶も出してくれない。どうも変な気持ちがして聞いてみたら実は俺達が放射能を持っているんじゃないかというんで怖ろしいというんだ。俺達の坐ったあとも後からよく拭きとろうと思っている、というんですよ。気のおけない友達だから別に腹も立たなかったけれど」

暗い眼を細めながら船員たちは顔でうなずきあってしゃべった。「何しろ十三光栄丸の船員という泣く子も黙るというんですからね」終りの方は軽く笑いとばそうとしたけれども、それにつれて笑った一座の人々の笑いは淋しかった。口々に話し出される当時の心の打撃の大きさに私は暗澹とした気持ちに襲われた。

こういう話もあった。十三光栄丸の局長（無線士のこと）さんは三崎で世帯をもっていたが、帰宅する前に奥さんに洗濯物を送りとどけた。奥さんもやっぱり気持ち悪がって、それを新聞紙でつまんで共同水道の所に持って行って洗おうとした。すると大家さんに見つかって断られ、さんざん嫌味を云われて、とうとう居てもたっても居たたまれず、子供を連れて国に帰ってしまった。主人の方は何か月振りで帰ってきたというのに、妻子に一目も会えず、からだの方もはっきりしないままに他の船に臨時雇いとして乗り込んで又出港してしまった、というのである。この局長さんがその苦しい気持ちを船主のところに持って行ったら、船主が、それじゃ正式に国立病院ででも見てもらって証明してもらったらいという事になって、初めて病院で全員が診察を受けたのだそうだ。（それまでまぐろの廃棄や船の洗滌などに夢中になっていて、船員の精密検査など全く考えられていなかった。）とこ

ろが血を太い注射器で二本もとられて帰されてから二週間たった昨日になって、やっと、しかも電話で「別段心配するほどのこともないだろう」とだけ云って来た。白血球がいくらあったのか、体の症状が一体どうなっているのか全然教えてくれず、ただそれだけである。白血球が少ない人があるというのでそれが誰か聞いても教えてくれない。

「血をとられて、研究材料にされ、あげくのはてがだろう返事だ。もう絶対に行かない。俺たちはモルモットじゃないんだ。」

激しく叩きつけるような言葉であった。二度目に向うで来てくれと云って来た時は、皆で申し合わせて行かなかったという。

「本当に親身の診察をしてくれるのなら、どんな事をしてもとんで行く。なにしろからだは資本なんだから。」

数日前総評の調査団と共に来た民医療連の検査の結果では、白血球が正常値にやや近いというのでやや安心したそうだが、国立病院での白血球の数を覚えていた一切の人は、国立病院の時には、今度の時より二、〇〇〇近くも低かったといい不安な表情だった。（その後民医療連の二度目の検査では全員低下の徴候を示したという）

「俺達は、何時も海水で飯を炊いているんですよ。ビキニの近くでも毎日三度三度その飯を食べていた。魚に灰がつく位なら海水にも沢山降っているだろう。それを毎日食って来たんですよ」暗然とした面持ち。

「全く皆シミツ（秘密）主義なんだ。カウントを計る時でもいくらあったのか教えてくれない。た

だ検査官の顔色とあのガリガリいう音で見当つけるほかないんだ。」

「全くわけがわからんですよ。船は海から帰るまで何回も洗うし、小さい船だからそれでなくても毎日波に洗われていたのに、船に出たんだし、俺のメリヤスシャツは八回洗濯したのにガイガーでガリガリ大きな音を立てた。検査官が首をかしげているんです。それが船の方は、今度大洋の船団で出るっていうんで一日かかって朝から夜中まで石鹼でごしごし水洗いしたんです。それで後から測ったらもう放射能はないって云うんだ。そんなに簡単に落ちる位なら、人間の体だって石鹼を十も使ったごしごしすればなおる筈ですよ。いくら高い石鹼でも一つ一〇〇円もしないから一〇〇〇円でおおるなら安いもんだ。石鹼で落ちる位なら福龍さんだってなおっている筈だ。」「魚に出たって云う人だったら、外に居た俺達にも何も影響がない筈はないと思う。」

色々な形で出されたけれども、それは不明確な科学陣への痛烈な批判であり、厚生省の誰におもねったかは知らぬが徹底した秘密主義への不満であり、その両者から必然的に出てくる。自分自身への肉体への果てしない不安であった。

「原爆やめるまでは南の海には行きたくない。」

ぼつと云った船員の言葉が千鈞の重みで私の胸にひびいてくる。二十四名の光栄丸船員のうち船主に縁故のある上級船員数人を除いて十七、八名は再乗することをやめたそうである。しかも他の船に乗ろうとすると、「体のはっきりした証明のない間は、雇えない」と冷たく断られてしまうという。南の海には二度と行きたくない。しかし食うためには船に乗る他ない。だが乗ろうと思っても体のことで断られる。しかも、現在の封建的な歩合制（全水揚げの売上代金から必要経費を差引いた残

りを六分四分とか六・五分三・五分で船主と船員全部とで折半する制度）のため今度のような場合は少しの収入もなく、日々の煙草錢にも事欠く。船主に交渉してやっと一人一万円（船主と縁籍関係にある上級船員は最高五、六万円もらっている）ずつ借りたけれどもそれも殆どなくなつて、このままでは国に帰る旅費もない。（彼らは皆東北、四国などの出身である。）たとえ旅費をくれたとしても手ぶらで妻子の所に帰ることは出来ない。船主は二十日までには補償の目鼻がつくから、それがはつきりしたら、その中から金を出してやると云っているの、それを待っている、という話であつた。更に船員たちはまぐろを廃棄する時、彼らの着衣から寝具類まで全部海中に投げ棄てた。それは一人三万円近くにもなると云う。

そこで水爆そのものへの批判を聞いてみると、光榮丸の船員も他の船員も鋭い形でどんどん問題を提起してくる。

「原水爆をやったら日本の水産業界はどうしても生きて行けない。世界の人達の力でやめさせることは出来ないものだろうか？」

「アメリカ国内でやってもらうといい。公海の中でやるなんて常識はずれだ。」

「水爆は国際管理にして、社会の福祉のために使うべきだ。」

それはあなた方全部のお考えですか、と質問すると、自分の船ではそう話し合つたという答えであつた。

「黒潮は日本沿海まで来ているんだから、原爆まぐろだつて近海までやってくるかも知れない。日本人全体が放射能のある魚を食う可能性だつて出てくる。」

「政府はこういうことをアメリカに何故はつきり云えないんですかね。」

「レントゲンでさえ沢山かけると子供が出来なくなると言うが、原爆を何度もくり返したら、魚だって子種が切れることになる。」

多くは問いかけの形で出されたが、その底には激しい憤りがはつきりと秘められていた。果たしてアメリカに止めさせることが出来るだろうか、という問題を提起してみると、出来るというもの、出来ないというものの色々あったが、とも角も世界に訴えなくてはいけないということが結論的に出た。

二十日の町民大会のことについて聞いてみると、驚いたことに十三光栄丸の船員たちは何も正式に聞いていないという。今日町を歩いていてポスターを見てこんなものをするのかと思った、というのである。三崎地区労（地区労協が正しい）が主催でありしかもその中心となるのは船員組合である。町民大会を、最もこの問題について発言権のあるべき筈の被災船員が知らない。実に驚くべきことであつた。船員たちは主催団体などには全然注意せず、町民大会が船主や業者に牛耳られてどうせ町の補償のことでも決めるのだと思つたそうだ。船員組合委員長の話では十三光栄丸の船員に是非当日話すように云つたが皆がそれを承知しない、という筈だったのだが……。奇妙な食い違いを感じながら色々話していくと、憤然とした面持ちで、

「同じ建物の中に居て、俺達に全然話がないってのは……」

などと云い出した。組合委員長は一般的な問題にしても組合員の意識が低いことが組合不信の最大の原因などと云っていたが、この船員たちのエネルギーな激しい言葉は、その言葉を完全にはね返していた。

政府はアメリカ指定の危険水域の五倍余りを指定区域とし、その中を通過した船は全て指定五港（塩釜、東京、三崎、清水、焼津）に入り検査を行わねばならぬことを指令したのだが、三崎港で一応放射能反応を認められた船は、指定区域を通過していないものが大部分である。極端な場合にはフィリピンのすぐ東から来た船までにも放射能が出ていること（その後、東京新聞四月二十二日、二十四日の報道によると、カツオや、インド洋まぐる及び近海まぐるにも三月以降漸増的に放射能が認められたという）から推して、指定区域を通らず五港に入る義務のない船は他の港（石巻、浦賀、大阪、下関、室戸など）にどんどん入っており、それらの港から検査なしのまぐるが市場に流れ込んでいる。それらの中に放射能を持ったまぐるがないとは決していえないという事実なのだ。――を考えてみると、真黒い雲のような不安が目の前にもくもくとひろがって行く。ガイガー計数器をいくら増産しても、補償をいくら要求して見ても、そのような消極的なことでは、もうどうしようもない所まで来ている。水爆そのものを禁止する以外には決してこの問題の本質的な解決はない、ということが実感を持って体ごとに迫ってくる。何かしなくてはいけない。声を限りに叫ばなくてはならない。今まで頭の中だけで考えていた原水爆禁止という言葉が、最早単なるスローガンとしてではなく、私自身の要求として、体の奥底からつきあげてくる。

光栄丸の船主Kさんは、小肥りで、あたりの柔らかそうな人で、余り多くをしゃべらなかったが、質問には一々ていねいに答えてくれる。十三光栄丸の積載まぐるは一三、五〇〇貫、市場価格として六〇〇万円が海中に投棄された。それは経営的にかなり大きな打撃であり、そのことが今度の十三光栄丸の大洋船団への身売りの直接原因でもある。（事件以来、大洋の母船形式によるまぐる船団への

申込みが増加していることは、中小船主が今度の事件を契機として、独占資本への従属化の傾向を促進させられている事を示している。Kさんは今度の廃棄処分についての厚生省のやり方が実に不明瞭であるという。カウントもはっきり知らせず、まぐるを全部調べる事もしないで、廃棄しろというのは無茶だ。しかも船体は石鹼で洗ったら放射能が無くなったという。それならまぐるだって洗ったらある程度放射能も落ちるのではないか？ この疑問の出し方は船員達が自分の体のことと結びつけてむしろ否定的であるのに対照的であり、このくい違いの本質について深く考えさせられた。水爆については、どうしてもやめてもらわなくては困る。マーシャル群島は中型まぐる船の絶好の漁場だから、その生死にかかわると強い語気で言い切った。船員の生活資金としては一人二万二、三〇〇〇円から五、六万円まで内渡し金として渡してやったと云ったが、船員側の話との大きな食い違いは奇妙な疑問として胸に残った。

次の日沿岸漁業の漁業者たちの話を沿岸漁業協同組合や沿岸漁業船員組合で聞いたが、それでも原水爆の間接的な影響が大きく響いており、魚価の一般的値下がり、魚商の支払いが悪くなったため、最近それだけでなくも苦境に立っている沿岸漁業が絶体絶命の所まで、追い込まれてしまっていることがよくわかった。さらに、水爆の問題とからんで、アメリカに対する不満が沿岸漁業の日々の作業の中で湧き起こっていること。

たとえば、小笠原近海で操業していた漁船が米艦に小笠原領海侵入として捕えられウェーキ島に連行されて取り調べを受け、約一カ月抑留されて罰金一、五〇〇ドルをとられた。これに対して協同組合が抗議したところ、「共産圏からの侵略に備えるため日本国民もアメリカの秘密防衛に協力された

い」という一片の返事で済まされた話とか、伊豆沖の演習区域でも演習期間が切れたので出漁していると、いきなり急降下爆撃をくらって、あわてて網を投げ捨てて帰って来ることが時々あり、このことについての抗議にも「諸種の事情により期間を延長した」という一方的な通知を寄こした切りで勿論網の補償などしてくれないなどという、植民地日本漁業の苦悶が、原水爆と同じ角度から切実な問題として出されて来た。

翌二十日午後二時半過ぎになって町民大会が開かれた。船員組合を中心にオート三輪に乗ってメガホンを手にした呼び込みも空しく集まったのは六〇〇七〇人ばかりだった。(その後三〇〇人位になったという。)経過報告が船員組合委員長から述べられ、次いで十三光栄丸の機関長(船主の親戚)から大会への訴えが読まれたが、私たちが座談会で聞いた船員の苦しみと憤りをこめた言葉とは違って、何か流麗な文章に作りあげられそれを読む機関長の表情はでくのように動かなかった。婦人を代表して立った人は、「原爆の被害から受ける夫を子を守ろう。人道を無視した原爆を禁止させよう」と訴えた。

社、共の町議は交々立って町民大会が町当局主催で開かれなかった経過を説明し、原水爆禁止、損害補償をアメリカに要求しよう、つなぎ資金の獲得などについて語った。共産党町議は又光栄丸船員の生活問題の実態を語り、彼らを救済しようと訴えた。

多くの団体からのメッセージが読まれたが、特に同じまぐる船の四国での根拠地、室戸岬の船員同志会からよせられた電文「スイバクジケンキンシヨメザシトモニタタカワン」はとくに大きな拍手で迎えられた。

①公海自由の確立②治療・生活費の完全補償③災害補償の完全実施④原爆禁止が採択されたが、緊急提案として民主医療連の医師が「光栄丸船員に生活、医療保護の適用を町会に要求しよう」と提案し満場一致で決議された。

光栄丸船員救済のための資金カンパはその場で六、六七〇円集まった。

採択されたスローガンを骨子とした大会宣言が読み上げられ拍手で迎えられたが、これを読んだのは光栄丸の漁撈長（船主の弟）であった。こうして大会は終り、二一日の県民大会にこれが持ち込まれることになったが、一番下部の被害船員の声はどうとう叫ばれず、市民にも彼らの苦しみの実態がどれほどわかったかは疑問であった。

又光栄丸船員が首を長くして待っていた船主の回答は四月二十七日まで待てという言葉であった。あまり成功であったとは云えない大会の教訓を胸に、光栄丸の船員の苦悩に心を残しながらまぐろの港、三崎を去った。

（『文学の友』54・6より）

水爆実験にたいする漁夫の意識

水産事情調査所員 高橋 富士夫

一

ビキニ水爆実験の直接的な、生命にかかわる被災者はカツオ・マグロ漁船労働者である。焼津の実態調査では、彼等の賃金が前年にくらべて半減またはそれに近いほど減少したことが、明らかにされた。神奈川県三崎や高知県室戸でも同じ結果があらわれている。また周知のように、第五福竜丸の乗組員からは一名の死亡者と二二名の患者をだした。東南太平洋のマグロ漁場は水爆による汚染海域とさえみられる状態となったが、漁夫たちはいぜんとしてこの海域で漁撈作業に従事してきた。健康上の何の保証もない労働生活、汚染漁獲物ができればその労働の結晶はそのまま海中または地中に捨てられ、魚価が下がれば下がったで、賃金がそれに応じて切り下げられるという生活、資本家による経済的損失の漁夫への転荷、それが漁夫たちの生活であった。

水爆実験の中止という一定の政治的要求とそれを達成するための諸行動は、漁夫たちの抵抗意識を表現する積極的な側面である。事実彼等は二、三の地域でそのように行動した。

しかし、それが漁夫たちの意識と行動のすべてではない。「実際に被害をうけたと考えられる当事者が被害を意識しない」(漁業経済研究第三卷第二号七五頁) ような、おくれた状態が漁夫のあいだにつくりだされている。そういう漁夫たちのいる地域では、日常的な要求を達成するための労働組合

さえ組織されていない。労働者としての意識の成長がきわめて未成熟である。焼津の漁夫たちにそれが代表される。

これとは反対の、漁夫の意識と行動における積極的な、抵抗の側面、それを三崎や室戸岬にみることができる。どちらの地域でも漁夫たちは以前から労働組合を組織していたし、日常的な要求を達成するために斗ってきた。たとえどんな制約があったにせよ、漁夫が労働者としての意識にめざめる初步的な条件は保障されていた。

このような漁夫の意識の主要な二つの側面、消極性と積極性、従属と抵抗がどのように行動化されていたか、それをのべてみる。

二

ひと口にいてみれば、水爆実験にたいする漁夫の対応行動をつぎのように特長づけることができる。

対応行動にあらわれた特長として

一、漁夫がすでに労働組合をつくっており、労働条件を改善する斗いを進めていた地域では、反対行動の主導権を漁夫がにぎり、運動を前進させた。

二、三崎では、それが各産業労働者の地域的な共同斗争に発展し、地域協議会をつくる基礎となり、また、室戸・室戸岬では、それが運動を、全町、全地方的な諸階層をふくむ統一行動に発展させる基礎となった。

— 対応の抵抗的側面

三、反対に、労働者の基本的権利である労働組合をつくる権利さえ漁夫がその手に獲得していない地

域（焼津）では、運動が地域の有産者・権力の利益に従属され、運動はほとんど彼等だけのものとなり、町民大会さえ五、六カ月も遅れてようやくひらかれている。

—対応の従属的側面

対応行動の若干の事例として

三崎では—四月二〇日に全国にさきがけて水爆対策三崎町民大会がひらかれた。大会を主催したのは三崎地区労働協議会で、この地区労協にはつぎのような一〇労組が参加した。三崎遠洋漁船船員組合、全ティ、電通、東電、県職組、日教組、京浜急行労組、田中船員労組。大会は、公海自由の確保、治療生活費の完全補償、水爆被災補償の完全実施、原爆禁止等を決議し、神奈川県民大会に代表を派遣した。ついで、三崎地区第二五回統一リーダーには漁夫たちが積極的に参加し、五月八日には漁船々員労組委員長を横須賀市の原爆被害実情報告会に、また翌九日には労組委員を東京の平和集会にそれぞれ派遣した。そして、この時期に三崎では船主・問屋たちが、マグロ類を売りこむこと、値下がり阻止することに大膽な宣伝をおこなっていたことが特長的である。たとえば、「食べて安全・三崎のマグロ」「無実の罪に泣くマグロ、放射能は誰にもあります」というのが彼等の主要な宣伝文句であった。

室戸・室戸岬では—四月二十七日に約二千名の参加する町民大会がひらかれた。この大会は、水爆実験禁止、水爆被災の完全迅速な補償を決議したが、船員労組である船員同志会のほか、町長、町議会、漁協、自民党県議等が大会にくわり、三崎と異なった町民の統一行動として運動が発足した。そして大会決議の実現をめざして芸東地区水爆対策協議会がつくられ、室戸・室戸岬両町のほか三六

団体がその構成員となった。反対署名も、船員同志会、日教組、婦人会、未亡人会の手で進んでおこなわれ、町の商店もこの運動にくわわった。同月二十九日に琴平町でひらかれた四国平和大会には協議会代表三名が派遣された。船員同志会はつねにこの運動の主導的役割をはたした。

焼津では―福竜丸事件直後に被害対策本部と市議会特別委がつくられた。前者は福竜丸およびその被災船員の取扱を担当する一行政機関であり、後者は市議会あるいは東海区および県の市議会議長会の諸決議を促進する一翼を担った。原子兵器の使用禁止、補償の促進その他が決議された。前述した三崎や室戸と異なるのは、決議の政治的内容―ほとんど変わらない―ではなく、それを採択する機関であって、焼津では重要な諸決議が地方自治体議会の範囲にとどまった。事実福竜丸事件の発生地であるにもかかわらず市民大会は九月下旬になってはじめてひらかれたという状態である。市民運動としての成長もほとんどみられない。漁夫たちは現状そして前途にたいしても深い不安におそわれたが、それをとりのぞくための行動はおこなっていない。

民科東京支部水産部会が三崎で（一九五五年四月）、また同高知支部が室戸・室戸岬で（同年六月）、それぞれ実施した調査結果をみると、水爆実験にたいする漁夫の対応意識と要求では、つぎの点が共通であった。第一に漁夫たちは自己のうけた経済的損失及び非人間的な取扱いを米日両政府の政策に對置させ、その上にたつて事態を判断していること。第二に、それを基礎として提起される政治的要求（原水爆兵器の製造使用の禁止）や日本政府にたいする不信が、日常的な生活防衛（被災船員の生活完全補償）の要求とむすびついていること。第三に、これらの意識・要求の成長が、彼等の階級意識の成長とほぼ一致し、むしろそれを急激に高めていること。

このような意識の変化が、前述した諸行動を保証していた。しかし、労働者が一般的におくれた状態にとり残されている焼津では漁夫たちは、ほとんど共通に魚価の低落だけが、心配だと訴えていた。生活補償に関する無関心さはおどろくほどだった。政府に対する補償要求も、船主に任せて自己をかえりみないという状態であり、水爆実験はこまるがアメリカから援助を受けているから仕方がないという声もきかれた。老漁夫はまたつぎのようにのべていた。「ビキニ水爆実験に大騒ぎして補償金をとることもいいが、焼津で一番困っているのはサバ釣の漁夫だ。これをどうしてくれるかが問題だ。」

焼津漁夫たちのあいだでは、ビキニ水爆実験がただ彼等の経済的損失―魚価の低下による歩合金の減少―としてだけとらえられている側面がつよい。原因が結果からきりはなされ、その結果をどう改善するかについてあれこれ考え方が集中している。船主と調査員との座談会では、つぎのような意見が、共通のものとして船主側からだされた。「水爆実験はこまるが、ビン長を高い値で買ってくれるので、この点はアメリカ様々だ。もしアメリカがビン長を高く買ってくれないようなことにでもなれば大変だ。」

漁夫のいう「援助をうけているから、仕方がない」という意識は、船主たちの当面だけの利害打算に終始した態度と、ある程度一致している。一船一家とよばれる前期的な焼津の労働制度は、そのおくれた側面によって、三崎漁夫のいう不当なアメリカをアメリカ様々にかえさせている。アメリカが日本の民主化よりもおくれた生産関係の温存にふかい関心をはらうのも理由のないことではない。

（漁業経済研究第四巻第一号より）

